

氏名(本籍)	張 巧 鳳 (中華人民共和国)
学位の種類	博士(体育科学)
学位記番号	甲第54号
学位授与年月日	平成26年3月10日
学位授与の要件	日本体育大学学位規程第5条の学位は、大学院学則第29条の規定により、大学院研究科博士後期課程(博士課程)を修了した者に授与する。
学位論文題目	日本におけるエアロビックダンスの受容と展開に関する歴史的研究 (1971-1986)
審査員	主査 教授 谷 釜 了 正 副査 教授 関 根 正 美 副査 教授 西 條 修 光

### 論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は1980年代の日本において、エアロビックダンスがどのような理由によって受容され、その後どのように展開しながら普及していったのかについて明らかにしたものであるが、健康を志向する当該のダンスがどうして傷害を引き起こすことになったのかについて立証しようとしている。アメリカで誕生した健康運動としてのエアロビック・エクササイズがダンスと結びついて日本に移入されたことによって、健康を志向するという理念を徐々に欠落させることになった点に着目しているのはそのためである。

本論は3つの章で構成されている。「エアロビクス理論及びエアロビックダンスの誕生と進展」(第1章)、「日本におけるエアロビックダンスの受容」(第2章)及び「日本におけるエアロビックダンスの展開」(第3章)である。

第1章ではエアロビクス理論及びエアロビックダンスが日本に受容される以前の状況を史的に明らかにしているが、エアロビクス理論の創始者ケネス・H・クーパーとエアロビックダンスの創始者であるジャッキー・ソーレンセンの功業を取り上げるとともに、両者の提唱・考案による運動が融合するプロセスをたどることを通して、エアロビックダンスがエアロビクス理論から離れた運動へと変貌していった様子を詳らかにしている。第2章では日本の高度成長期に「ゆとり」(余暇時間と高収入)を手にした人々がスポーツやレジャーを通して「健康」をも手にしようとした結果、エアロビックダンスが受容られるようになったこと、また当時のメディアが人々の健康志向に応えるためにフィットネスとしてエアロビックダンスを普及させ、製薬会社がビジネスとしてエアロビックダンスの効用キャンペーンを行うことによって人々(特に若い女性たち)の日常に迎え入れられていったことを明らかにしている。そして、第3章ではエアロビックダンスがブームを呼ぶことになった理由と、このダンスが本来的に目的にしていたはずの健康の目的が剥がれ落ち、傷害を引き起こすまでになった理由について考察している。すなわち、このダンスがブームを引き起こしたのは商業的に利用されたり、レオタードファッションによって人々に性的関心を抱かせたりしたことによるが、このブームは多くの関連施設を開設させるほどであっ

た、と分析する。また、このダンスの競技志向が前面に押し出されるようになって巧技に走るようになり、エアロビクス理論から乖離した非科学的運動処方（プログラム）を容認する風潮も手伝って、傷害を招くことになったという。

結論として論者は、以下のように整理している。1980年代のはじめにアメリカで科学的理論（エアロビクス理論）に基づいて考案されたエアロビックダンスは、フィットネスとビジネス戦略の両側面をもって日本に受容された。またこのダンスで着用するレオタードが性的イメージを増幅させたことを利用して普及が図られていった。しかし、この業界における指導者が不足したことから指導者の粗製濫造の傾向に歯止めがかかることがなかった。そのため広くエアロビクス理論に基づいた適切な指導をすることができず、激しい科学的根拠を欠いた運動から構成されたダンスに対して警鐘が鳴らされることもなかった。そのためダンサーは身体的傷害を被ることを覚悟しなければならなくなったのである。加えて、このエアロビックダンスは競技化の道を歩むようになると、健康志向のダンスは勝利至上主義のダンスに取って代えられ、傷害問題を引き起こすこともなった。

以上が、論者が本論文の中で検討した内容であるが、大気汚染や労働内容の変化による運動不足の問題などから日本人の健康が問題視されていた1970年代に、健康運動論としてのエアロビクス理論が紹介されたことによって、その理論に基づいたエアロビックダンスは大いに期待され、広く普及することになったが、ビジネス戦略に巻き込まれたことによって本来の運動の効用が二義的となり、指導者不足が競技一辺倒のエアロビックダンスの先行を許し、健康の対局にある傷害を社会問題化させることになったとする見解は、これまでにみられない知見である。この知見をうるにあたって、論者はケネス・H・クーパーの理論とニール・ソーレンセンのダンス論に関する論文、アメリカにおけるエアロビックダンスの状況を記した文献等を渉猟し、さらに日本に受容されたエアロビックダンスに関する論文や記事を収集し、的確に分析している点は博士の学位を取得するに値するものと高く評価される場所である。なお、競技スポーツ化したエアロビックダンスが傷害を引き起こすことを指摘されてからも、衰退することもなく実施されているが、その理由はどこにあるのかについては十分に解明されていない。この問題については今後の課題として期待したい。

## 最終試験結果の概要

申請者は博士後期課程を修了するのに必要な単位を取得していること、また論文の審査において綿密な史（資）料の蒐集と的確な分析がなされていることが確認された。さらに申請者（論者）は、アメリカで誕生したエアロビックダンスが健康を目的としたエアロビクス理論に基づいて考案されたものであったが、やがて競技化の方向にながれ、健康とは対極にある傷害を被る運動へと変容し、1970年代の日本に受容されてブームを呼ぶほどの展開をみせたが、アメリカの場合と同様に傷害がつきまとい、これが社会問題にまでなった、とする。日本の1970年代は大気汚染や水質汚染など公害問題が人々の健康への意識をたかめた時期であるが、健康を第一義的な目的にするエアロビクス理論とエアロビックダン

スが受容されたとの指摘や、エアロビックダンスが初期の目的から逸脱し競技化へと向かった影響がメディアや製薬会社のビジネス戦略を通して日本国内に及んだとする指摘は評価されねばならない。本論文で解明された知見は客観的分析に基づくものであり、したがって博士の学位にふさわしいものと判定された。

審 査 員

主査 教授 谷 釜 了 正

副査 教授 関 根 正 美

副査 教授 西 條 修 光